✧✧✧✧✧✧✧✧✧✧✧✧✧✧✧✧✧✧✧✧✧

✧　気候講演会『地球温暖化と雨』を開催

平成 27 年 1 月 16 日（金）15 時から気象庁講堂において、3 名の講師により「地球温暖化と雨」をテーマとした気候講演会が開催されました（気象庁、（一財）日本気象協会と当センターの共催）。

講演 1 は、気象庁気象研究所環境・応用気象研究部　第二研究室長　高薮　出氏から『将来の雨予測　−より精度の高い予測への取り組み−』と題して講演が行われました。

気候変動に関する政府間パネル（IPCC）第 1 作業部会の最新の第 5 次評価報告書では、全世界で大雨の頻度・強度ともに増加している地域が多い可能性が高く、将来も中緯度・湿潤熱帯域で増加の可能性が非常に高いとなっている。日本国内に限ってもこの 100 年の強雨統計で増加トレンドとなっている。雨の降り方が将来どのように変わってゆくのかの予測を日本の地域ごとに行うためにダウンスケーリングという手法がとられている。いくつかのモデルによるダウンスケーリングの結果では、今世紀末に向けて山地の南西側での降水量の増加が顕著であるとの内容でした。

講演 2 は、京都大学大学院高額研究科教授　立川　康人氏から『地球温暖化による降水量の変化に伴う洪水・浸水・氾濫の予測技術』と題して講演がありました。地球温暖化に対応する洪水予測について①洪水の発生頻度に対応する洪水の大きさを予測すること②豪雨や洪水が進行している最中に、数時間・数日先の洪水の大きさを時々刻々と実時間で予測すること③物理的に考えられる最大クラスの洪水の予測がある。被害を最小限に抑えるためには最大クラスの浸水発生を想定し、避難場所や避難経路が確保される町づくりが必要。わが国で大規模な風水害をもたらすのは台風。地球温暖化を考慮したうえで最大クラスの台風を想定し、これによって引き起こされる洪水を予測することが重要な研究課題。これらの内容について現在の取り組みを話されました。

講演 3 は、国立環境研究所　社会環境システム研究センター総合評価モデリング研究室　主任研究員　高橋　潔氏から『地球温暖化リスクに関する最新の科学的知見−IPCC 第 5 次評価報告書をふまえて−』と題して、将来各分野で予期される影響（地球温暖化リスク）についてよく理解しておくことは重要。リスクの大小は気候関連の危害・曝露・脆弱性の 3 つの要素により決まる。緩和策による危害の制御、すなわち気候変化の抑制と、適応策による曝露・脆弱性の制御の双方を併せて行う必要がある。温暖化リスクの管理に際しては、緩和策による危害の軽減に取り組むとともに、同時に適応策により曝露や脆弱性を減らすことで、許容可能な範囲にリスクを抑えることが大事になるとの講演がありました。